

心の準備もないままに、イースターが竹内司祭のアグネス教会での最後の聖餐式となってしまいました。馬込便り編集委員たちがシリーズでお願した「キリスト教の礼拝」は前半の二回目をお届けしたばかりです。

すでに竹内司祭よりは今回に続き「聖餐式という集会」「個々の役割とその責任」など皆様と是非共有したい大切な内容のものを受け取っております。

馬込便り編集委員は小冊子としてこの後の部分を編集しなおして皆様にお届けしたいと思っております。皆様の身近に置いていただければ、編集・印刷作業を行っていきたく思っております。今しばらくお待ちくださいますようお願いいたします。

人は自己の存在を、普遍性と永遠性に触れるものと理解したとき、神という存在に直面させられる自己を認めざるを得ませんでした。そして、すべてが「見えないもの」と関わることも知りました。「見えないもの」とは究極的な時空を超える無限と永遠の存在であることも知るようになりました。

ここで、人は、あらためて、「見えないもの」が自己の存在の根拠としての意義を持つことを理解し、その

「見えないもの」への接近をもって、人の存在の意義と意味を捜し求める旅に出発するのです。見えないものを捜し求める旅です。この旅こそが人の生きる姿であり、死に向かう人の普遍的な旅の姿と理解するようになったのです。

「神を見る」(The Vision of God) ことこそが、人の存在の根底にあってその存在自身を支えることを知ったのです。それは人が感じ取っているこの世界における限界からの解放の旅でした。(この解放の旅を共にする人たちの協働の行為を「礼拝」と呼んでいます)



目に見えるものは人にとって限界の表象である一方において、目に見えないものこそがその限界を超える存在であることが明らかとなるといえるのではないのでしょうか。

聖書の民は、この「人の旅」を協働の食事において表現し、感じ取る

うとしました。それは、取り分け、食べることが人のいきることの最も端的な象徴と捉えたからです。

ここで言う根源的な営みとは、人が知る限界を、時空を超えて捉えることと云うべきでしょう。人は、誰でも、他者の存在の中に、自己の存在におけると同様に、「目に見えないもの」が潜んでいることを示したのです。

■ キリスト教会の礼拝 ■
司祭 バルトロマイ 竹内謙太郎
『キリスト教会とは何か ②』

よってすべての人が普遍的で永遠的な存在の様態、すなわち永遠的秩序の中に在ることを示しました。それはすべての人のあらゆる体験、生きる姿と死ぬ姿において、全く一つの、誰にとっても全く同様の存在の態様に向き合っている現実の表現でした。

主イエス・キリストは晩餐の席上、

このようにして人の生と死の普遍性と永遠性を現実として示したのです。そして、人はそのような食事の席、すなわち普遍性と永遠性を内包している食事において、その根源である神を見るという行為を実現されたのです。

一つの食卓においてすべての人と食物と飲み物を分かち合い、互いに足を洗うという行為が、神を見ることと直結すると教えられたのです。

こうして、「最後の晩餐」すなわち「主の晩餐」に参加することが、神を見る、見えないものを見るとき、限界の中に在るものが限界を超えたものに出会うということ、人にとって、人が生きることと死ぬことを最も根源的に示す場に自己を置くことと教えられたのです。

それは換言すればすべての人を支配する限界からの解放に他なりません。キリスト教会の民が、今、絶えず行い続けている「聖餐式」とは、まさにこの主の晩餐であります。あらゆる限界からの解放の表象です。人は、この時と場において、「見えないもの」、その根源である「神」と出

会います。

それは同時に、人がすべての人と共有する普遍的で永遠的な生と死の現実、それは主イエス・キリストが具体的に示されたものですが、その現実と向き合うときでもありません。



その向き合うことによって、人は、自己の存在を確認し、同時にすべてを共有する他者と出会うのです。(この具体的な機会を礼拝と呼んでいます。そして共通の普遍性を持った時が教会暦です)。

その故に、聖餐式は日々変化する

人の姿を、生と死という座標軸において確認し続ける協働の行為と言えるでしょう。その様にして参加するすべての人たちが全く共通の課題と方向性を持つ故に、一つの聖餐式という機会は、参加者の協働の行為と呼ぶなければならないでしょう。

キリスト教信仰とは、まさに、この行為を共有しようとする人の意思の働きなのです。すべての人の協働の行為と呼ぶべきではないでしょうか。

この行為の中心に存在するのが、見えないものに直面させようとする神の働きである主イエス・キリストそのものなのです。

人は主イエス・キリストと共に聖餐式という普遍性と永遠性をその本質とする行為、限界からの解放、完全な自由において初めて神という「目に見えないもの」との対面を果たすのです。それは同時に、人それ自身との出会いでもあるのです。

その故に、キリスト教礼拝とは、



主イエス・キリストという人格とその生涯の出来事を通して表現された(目に見えないもの)を「目に見えないもの」として神の働き(神の恵み)との出会いの場であると申しましよう。(完)

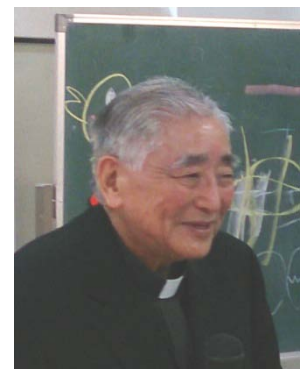


<巻頭言より>

またその精神を受け継いだ教会は、共同体内においては、互いに声に傾聴しながら対話することや交わることを大事にし、共同体外に向けては、人々を‘歓待(ホスピタリティ:hospitality)’、‘傾聴’、‘執り成しの祈り’を挙げてキリストに結ばれたものの生き方についての理解を深め、最後に人々に関わることに具体的な実践を提案することとする。

西欧化された個人主義世界に生きている現代人にとって、人々に関わることはどういうことなのか。西欧の産業社会は、性関係以外には他人を必要とすることも頼ることもなく、自力と自負心を持つ自律的な個人になることを理想とし⑩、 理念化された個人主義は、国境を越えてあらゆる文化と精神に浸透され、近代を貫き世界を支配してきた。ところが、個人主義と自己中心性という理想は、人々の間に疎外や愛情欠乏を招き、人格や関係性の崩壊などを負の遺産として世に与えたと指摘されている。とは言え、未だに個人主義と自己中心性が価値のある理念として猛威を奮っている状況の中、西欧の価値と文化から多大なる影響を受けているキリスト者は、人々に関わることをどのように理解する必要があるのか。

⑩Albert Nolan『今日のイエス：根本的な自由の霊性』ユ・ゾンオン訳(ブンド出版社、2011)、p.33.



バルトロマイ 竹内 謙太郎 司祭 (2018/3/27 イースター)